



学校法人
鎌倉女子大学

平成20年 創立65周年の新春に

平成の御代になって早いもので20年が経ちました。20年というと、赤ちゃんが成人するわけですから、十年二昔、人間も学校も、それ相当の経験が蓄積されるわけです。

極めて個人的なことではありますが、この20年の間には私の家族の境遇も仕事の内容も、大きく様変わりしましたし、この学園も、学父・尚先生が亡くなったり、先生の最後の仕事であった二階堂学舎が建設されたり、大船キャンパスが開設されたり、学部・学科や大学院が増設されたり、大きな出来事が続きました。

そして、ちょうど区切りのいい平成20年の今年、奇しくも鎌倉女子大学の創設65周年目にあたります。65周年のことについては、後日『緑苑』の方にもう少し詳しく書いてみたいと思っておりますので、この『学園だより』では、年頭にあたり、皆で次のことを確認するだけに話を止めたいと思います。

それは、創立60周年にあたる平成15年に新キャンパスの開設記念行事を挙げたばかりなので、これといった表立った式典行事は行いませんが、教職員・学生・生徒一人ひとりが学祖・松本生太先生が願った人づくりの理想にあらためて思いを馳せ、教職員は教職員として、学生・生徒は学生・生徒として、日々自分自身が果すべき課題にそれぞれ真摯に取り組んで頂きたいということです。

昨年来、私は私で何が出来るのだろうかと考えましたが、『知と心の教育 一鎌倉女子大学「建学の精神」の話』と題して一本を執筆することで、自分なりの記念行事とすることにしました。

私は、現在大学院・大学・短期大学部の新入生諸君に「建学の精神」を講じているわけですが、これまではキャンパスの建設や学部・学科、そして大学院の増設、また恩師の著作集の編纂などさまざまな仕事に追われて、なかなかまとまった著述に手をつける時間と余裕がありませんでした。でも、講義の方は、学生諸君が熱心に聴いてくれますし、真剣な答案を書いてくれますので、これまではメモ書き程度のプリントで授業をすませているものですから、内心忸怩たるものがあり、いずれきちっとしたものを書かなければいけないと思いつけていたわけです。また、これまで本学には、建学の精神についてのまとまった著述がなかったものですから、是非残してもおきたいと考えてもきたのです。

しかし、学祖が掲げた建学の精神は、古今東西の教育の大思想と通底し、考えれば考えるほど容易ならざる教育上の大問題ばかりです。私としては、「創設者と歴史」をつづった第1章から、第2章「感謝と奉仕に生きる人づくり」、第3章「女性の科学的教養の向上と優雅な性情の涵養」、第4章「人・物・時を大切に」、第5章「ぞうきんと辞書をもって学ぶ」、第6章「知育・徳育・体育の調和」というように筆を進め、これらを歴史篇・理念篇・

目的篇・姿勢篇・方法篇・体系篇という6つの側面から整理してみましたが、これは、私なりの一つの整理のつけ方に過ぎませんし、その内容も、皆が皆、私と同じように考えなければならぬということでもありません。

大学生を念頭において書いたものですから、初等部や中等部の皆さんにはちょっと難しいかも知れませんが、一再ならず原稿を若い大学生に目も通してもらい、教育思想書としての水準を維持しながら出来るだけ解りやすく書いたつもりです。

広く読んで頂ければ、また創設者の想いをあらためてご自分なりに考えてみる時の素材にでもして頂ければ、嬉しく思います。

数年前、本学の先生方の共同執筆による『子ども心理学入門』を手掛けてくれた北樹出版が出版を快く引き受けてくれたものですから、鎌倉女子大学の建学の精神についての著作が一般書店にも並ぶことになっています。

[>前のページへ戻る](#)